

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	自殺を論ず <sup>※</sup> : 論説
Author(s)	黛南
Citation	龍南會雜誌, 121: 18-28
Issue date	1907-06-17
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6034">http://hdl.handle.net/2298/6034</a>
Right	

臥雲日件録には、康正長錄寛正年間を通じて、僧周鳳より縉紳其他に問ひし例甚だ多し。

空華日工集には、流石に義堂の自記とて、問ふよりも問はるゝ方の記事多し。康暦三年二月九日「儒士秀長至出釋尊雲井坂兩詩而求改」全八月十四日「翰林菅秀長來說且出和歌序而未改、盖明日内相府賞月之會也、余爲改之」永徳二、正、十、「侍從中納言殿至、出和余門字韻呈二條准后詩八句者、求余改、今數字云々」全廿七日「二條准后以使送聯句求改、且點々六十句改數十字」尙は康暦三、十、二、「爲二條攝政殿求、點倭漢聯句」全十二月廿三日「茅玉畹神茗而來、且出看山聯句詩一百韻者而求點兼改」

(未完)

## 自殺を論ず

黛

南

永劫の過去より、最近の現在に亘り時の經驗的事實は、吾人に證明して曰人生は、矛盾也衝突也、少くとも不合理なりと。吾人は更に是に附加して曰はんとす、是等矛盾衝突を前提として、推論し得たる究竟の斷案は自殺也と。

夫れ宇宙本體の分派作用によりて、發生したる無數の、單一性細胞が、或偶然的事件により、相互的凝結の一團塊を形成し、之に與ふるに生命の脉絡を以てし、施すに智、情、意の粉粧を以てしたるもの則ち人間也。そが神秘的、超越的なる性靈の權威を認識せられ、一切事物の上に、儼然たる君主の特權を執行するに至つて、始めて人間の偉大を肯定し來る。其未だ然らざる間は、彼が價值

や要するに、相對的也、比較的也。思ふて爰に至る、吾人寔に茫然として淚溢れ蕭然として悲痛大息せずむばあらざる也。

實にや、太天の法規は儼として、恣に人間小智の揣摩を容れず、精靈萬古に連りて、運行晝夜を捨てず、無限に始りて、無限に終る、博大無邊の自在力は、日に生々の斧を揮ふて、長へに萬物化の支配者たり。春時の紅紫は聽て深緑の夏に移り、秋に至つて清明の影を浮べくもの、枯瘦冬は早く已に其後にあり。而も十年又百年、其間の理法截然として一絲紊れず。唯人世にありては則ち然らず、昨は錦繡風に搖ぐ金樓玉關の人、今は既に北邙黃土一片の塵、昔時鳳舞鸞唱の地、只今唯短草の離々たる見る。あはれ節物風光相俟たず、百歲骨百歲の人あく宛轉たる蛾眉能幾時、鬢髻露冷かにし秋篠風に鳴つて寒く、觀く來れば寔に是れ紅爐上一片の雪、亡滅と解讎の影は僅かに、跼歩の間に入り、而して其行路の險峻ある、忽ちにして蠶々たる摩天の絕壁、忽ちにして窈冥たる千仞の深谿、顧みて前路を思ふ恍として夢の如く、驚いて行手を望めば、烟雲徒らに迷濛たり。若し夫れ獨り人間のみならず宇宙萬象の存在は要之、盡く相對的也。彼の一元論の根蒂が稍もすれば其説明に於て、二元論の園内に侵入するが如く、二元論も亦夫れ自身の完全に對して、一元論の存在を德とせり。這個物心兩界を通じて獨絕對無上の權威を有するものは、天下唯「吾」あるのみ。而してこの吾や時としては包有的に存在し時として特立的に發現す、其包有的たる場合は、則ち大我にして、其特立的なる場合は小我なり。既に大我は包有的あり、故に彼は常に一個あり、寔に渾然たる一大白玉たり。莊周の所謂無何有郷は是あり、禪の大悟徹底は是あり、而してこはやがて宇宙の大靈

と融和冥合す。獨り小我の特立的なる、それが自己の内部にあるとき自己の「吾」あり他人の裡に存在せるとき他人の「吾」なり、其存在の空間は普遍的にして、形式は則ち千差萬別あり。社會萬千の特殊現象が、簇々として生滅起伏万物諦視すべからざるものは、實に這の小我の所因たり。彼は向上的素質を有し、進歩的傾向を有す、日常社會百般の事件は必竟小我の相互的争闘に過ぎざるなり。小我の外部的形狀色彩は到底之を精査するに難しと雖、其内部を貫流せる一個の通有性は吾人之を洞見し得るに難しとせず然らばその所謂通有性とは何ぞ。厭世的觀念是なり。惟ふに人心極微の天真自然の聲は、獨り感情によりてのみ表出せらる、感情は由來直線的あり、勃發的なり、其間毫も理智の工夫を借らず、而して詩は實に感情性の唯一有聲の表象の道具たり、詩は則ち感情の一面にしてやがて人間天真の聲なり。若し夫れ古往今來詩的製作物の數何ぞ限らむ。而して其作物を通して現はれたる、著しき特点是其等作物の過半が悲哀の方面に成効して、歡喜の方面に失敗せるにあり。之れ明かに悲哀の經驗が歡喜の經驗より容易に人心内に接觸すべき可能性ある事を証するものにして換言すれば人は歡喜の快樂を感じる度より更に深く、更に明かに悲哀の快樂を寫象し得るの素質を有する事を立証するものに非ずや。之れ吾人が厭世的觀念は人間一切の通有性なりと云ふ所以なり。唯夫れ之の通有性より脱化して、遙かに純良にして高高なる悲觀的樂觀（云ひ得べくんば）なるものあるを吾人は提拱せんと欲するもの也。是はそが人生に對する見解が、素多苦的悲觀的なりしに拘らず、其強大なる意志と透徹なる理智との後援を以て、人生の悲痛欠陷を樂觀し之を以て却て一種有力なる快樂の對象たらしめたるものにして、極言すれば清濁二物併せ有して更に自家一流の別境地を開

拓くたりものあり。世の所謂自暴自棄に起因する、一時的感情の樂天は全然與らず。

寔に適者生存は宇宙の一大理法也。一虫一鳥一花一木の微に至る迄、苟も生命の繼續を有するものにありては、決して此理法以上に超越する能はず。實にや野の花の小さきも森の下蔭猶且可憐の芳芬を吐いて、紅紫の色を捧ぐるに非ずや。マンモスの大も、万古白雪の裡、時切の嚴令に葬むられて、百代の下僅かにそか存在の痕跡を、追はしむるに非ずや。小ありと云ふ勿れ、野の花の朝の光に微笑みたるは正に適者生存の條件に適合したものにあらずとせんや。而してマンモスは疑もなく、適者生存の劣敗者たりしあり夫れ人間世に生れて以來、其實と不肖と善と惡とを論せず、各皆固有の希望と目的と、思想とを抱有するは事實也。卑近低鄙なる本能性衝動の満足より、高遠幽微なる理想的光明の憧憬に至るまで、一に皆然らざるはなきなり。斯の如くして發途の準備勇ましく眞、善美の影を追いて人世の潮流に掉せし彼等が漸く歲月の累集を加ふるに従つて、始め齊一ありし步調は次第に乱調となり、進むもの後るもの將た右するもの、左するものあるに至り、其或者が健闘奮躍そが異常の才幹と意力とを以て縱横邁進し、能く世事の倖々と命運の迫害とに堪へ、遂に勝利者たる榮冠を荷ひ得たるに反し、或者は咨沮逡巡、氣飢る心慄き癡痕徒らに多きを加へ、殘骸唯命運の訶むに任するに及び、彼はあらゆる現實の希望を抛擲し、何等かある他物を借り來つて、現時の苦境を脱出せんとする、意識の革命的變調を構成す。這の革命的變調の所產物別言すれば強請的欲求の對象は即ち死の觀念也。換言すれば現在の一切繁累の脱離にして、萬事の休息也。然り而して此場合其遂行の唯一手段は、自殺あり。觀し來れば世上何ぞ片々として、自殺者の多きや、最近本邦に

於ける自殺者のみを以てしても猶一萬の多數に上れりと云ふに非ずや。痛むべき哉人生の不過衝突。遮莫人生の全部は慾望也。昔は權力を冀いてサタン亡び、智識を望むでアダム落ちぬ。而も吾人の望む處のものは絶對也眞如也、完全也、ホフプは曰はすや「人は決して幸ならず然れども常に幸ならんとす」とあり理想は遠く現實は齟齬す、人が日夕營々として、慾望の充實に汲々たるも、浮世の繁累徒らに繁くして、命運の荒磯浪長へに澎湃たり。事實に於て人は能く、現世の欠陥を認知せり、既に彼が現世の不满不平を認知せるに拘らず、其終生を通じて出來得る限の苦闘を以て、生命の繼續を希求し、現世の存在に執着す予盾ある哉此點よりして自殺は社會の予盾と人間の予盾とが化學的變化によりて、作出せられたる悲むべき產物とて見るべき也。而して吾人は此の所因以外他の一個有力なる自殺の教峻者を指摘論及せんと欲す、宗教的觀念は即ち是也。

惟ふに人心内在の空虚を補充して、現實以外に整然たる一大實在世界を形成する、想像上の產物は宗教也。而して其宗派の如何なるものたるを問はず、普通的に其重要綱領として認識せられたるものは人間精神の不滅あり。人は過去、現在、及未來の三界を通じて、永遠に存在の能力を享有すと云ふにあり。而して一個の全智全能の神的本體の實在を、想像して之を信仰するものは、永劫の福祉恩寵を蒙るべしと説くものはなり、故に人間の生活は單に現在の上に止まらず現在の生活は唯無限より無限に亘る、悠久時の連鎖上に立てる一ステーションに過ぎずして、現世の苦行は未來世に於ける唯一の得道方法にして、又實に過去に於ける罪障の贖回也。此等の假定説は深くも無智ある一般人民の心理に其根蒂を張り、遂に之を驅つて速かに人世の重荷を逃れ、苦痛を擺脫して常花匂ふ彼岸

の淨境を希ふに至らしめぬ。さばれ之等卑近淺薄なる宗教的觀念に因由したる思想は、素極めて幼稚にして單純なる感情的所産にして、其間少許理智の解釋を交へず。而も一度這の虛妄迷信的な思想の幻影を捉ふるや幾多心的生活の空虚を感じつゝありし人民は、沛乎として水の低きに就くが如く、無上の福音恩寵として隨喜渴仰し爾來風をかし俗を形り、今や遂に牢乎として振く可からざる根幹を養成し了むぬ、嗚呼恐るべき哉宗教の弊や而して更に驚異すべきは盲目的依信の勢力ある哉。

獨り上來の原因と全然沒交渉にして、獨立的ある別個の原因より生ずる自殺あり。吾人は之を名けて有目的自殺若くは道德的自殺と呼ぶ。在來悲劇詩の好個材料として、幾多後世人士の贊嘆同情を喚起したる薄倖ある忠臣義士孝女節婦が其君父夫婦の爲に、絶ち難き恩愛の羈絆を絶ちて、自刃割腹して死後の諫を容るが如き即ち是ありこは彼の盲目的ある感情性の發作に起因するものと異り、冷靜なる理性と更に崇高なる犠牲的大精神の發現にして、一些の批難すべき缺點を發見する能はず。然れども此種の自殺の如き現今に於ては、殆ど其跡を絶ち、よし之れありとするもそは彼寥々として影薄き晨天の星の如く、偏に最も能く義務的精神の發達したる、封建時代の特有物産たり。世の文明が人智の開發と物質の進歩と個人の自由とを哺育すると同時に、崇高熱烈なる犠牲的、義務的大精神の退歩を德憑するの觀あるは、確かに其大なる欠陥として時に文明呪詛論の出る決して偶然に非ず。惟ふに文明の反面には、先天的個人性の沒却を意味し、表面人に自由と發達とを教ふるが如くにして、實は沒我と退歩とを示しつゝあるなり。嗚呼顧みれば世上何ぞ輕佻浮薄なる才子ハイカ

ラの多き、彼等が眼は盲ひたり、彼等が「吾」は消滅せり、餘す處のものは唯臭骸と虚飾とのみ。所詮彼等や走屍かり行肉なり而も蛆糞中にありて其臭きを知らず、彼等口を開けば曰武士道は因陋なり、偏狹なり、時代遅れあり、「殺身爲仁」が如き愚に非ずんば狂なり、少くとも名利の觀念を欠如せる馬鹿正直ありと、あゝ、愚乎、狂乎、馬鹿正直乎、而も彼等が存在の全然無意味不成産的なるに比して、武士道の狂や愚や馬鹿正直やは、更に一段の奕々たる新光彩を放ち來るを知らず、咄憐むべき哉。

上來に於て、吾人は自殺の根本的動機及原因を論及せり。而して筆路は當然是よりして、個人を直接の交渉を有する社會に就きて、一瞥を與ふるの要を見る。夫れ社會は個人の集合團體あり、社會なる一形式は個人なる内容によりて構成せらる、而して是等二者の有機的關係は、新に吾人の生存上に於て、種々なる制約的條件の成立を要求し來る、權利の如き義務の如き則ち其主なるものなり、由來人間が群居的傾向を帶びて、已れ自身のみを以て、到底生存を繼續し能はざる事は、今更に喋々を要せざる所にして彼が群居的傾向は、爰に社會を組織し、國家を建設したり。既に彼は國家の一員社會の一分子として、團體的生活を營み其生命や財産や、其他あらゆる共同的の便宜を享受しつゝある以上、或定度迄は必ず之に對する報酬的義務の豫想を、肯定すべきは素よりあり、換言すれば彼は彼自身の行動に於て、一種の檢束と責任とを有し來る。従つて若し彼が本務的義務を怠り、忘るゝに於ては、彼が背德者、無責任者として道德的價値の減少を齎らし來るは極めて自然の數あり。吾人は素より義務的觀念と個人的性癖とが、全然相一致調和せざる可きを知る、而して義務の命



令と、性癖の命令とが、時としては全く反對の徑路を執り、遂に衝突、葛藤を惹起するに至る事例は吾人の屢目撃する所也。従つて此場合其義務の遂行に對し多少の苦痛、不快の念を誘起するは亦寔に止むを得ざる所なりとす。而もこの不快や苦痛を伴隨するが爲に個人の神聖を汚辱し、個人の威儀を蹂躪し、個人の價値を没却すると思惟し、之を否定し拒絶するが如きは、誤謬の最も甚だきものなり。是等の不健全ある沒常識なる、思想を抱懷するものは、之を大にしては國家社會の乱賊者なり、個人相互の敗徳者なり。社會は斯の如きの輩に對して、相當の制裁と鞭撻とを加へざる可からず。況むや吾人は這個義務の遂行により、却つて別個の快感と威儀と崇高とを意識するをや。彼の何等事由の伴ふなくして妄に苦痛、不快の情に堪へず、自殺を決行するが如きは、明かに社會の敗徳者なり、理智の觀念を缺如せる狂愚者なり一些の可なる所以を知らざる也。

人或は曰吾人の身體精神は、吾人自らの所有なり、吾人が精神身體の支配者、統治者は、吾人自らを措いて豈他にあらんや。已に吾人が精神身體は、吾人自らの所有なりとすれば、吾人が意志の命する處、感情の奔る處、恣にそが生命の繼續を斷止し得るの當然なるは、猶已れの財貨を隨意に、使用し得るの合理なりと相若く。何ぞ自己自身の所有物の處理に對し、第二者第三者の干涉と考慮とを必とせんやと。然り而も之れ其一を知つて其二を知らず、局部的小我見を以て、普遍的眞理を掩はんとする、井蛙的淺薄皮相の見たるは吾人上來の論述によりて明かなり。一切事物を離れて自個存在の無意義あるは、苟も事理を解するものの、等しく承認する所若し夫れ幸福と快樂とは人生の唯一目的あり、之等の獲得追求に對し毫末の障害を企及するものあらば、それは直ちに人道の敵なり、人生

の破壊者ありと云ふ如き乱暴なる單純なる感情性に驅られて、人間の制約的個体たるを忘却する輩に至つては其痴愚彼の自殺當事者と相若く。苟も人間的生活の過程を超越脱却せざる間は、依然として義務的連鎖の上に立たざる可からず。其實在の形式を消滅したる場合、即ち人と社會との關係が、絶縁せられたる場合なり。此時人は始めて自由なり。要之自殺の可能的價值は、個人對社會の一切義務の商量上より打算したる答解の數量によりて決せらる。

アリストテレス曰く「幸福即ち安寧は、一切の道德材幹特に最高の道德材幹を實行するにあり」と。爾り而して其所謂最高の道德材幹の實行に對しては、十分なる努力と奮闘を意味し、あらゆる艱難辛苦と戦はざる可からず。此意義よりして幾多社會の自殺者は正に無氣力、意氣地なし、等の名稱に價するものにして、古來幾多の偉人傑士として、後世人士の崇拜渴仰の標的たるものにおいて、孰れが運命の數奇に抵抗し人世の迫害と奮闘したりしものにあらざりける。彼等が逆境否塞の境遇に坐して従容自若、撓まず屈せず能く有終の美を獲得し得たる鉄の如く、巖の如き奮闘的性情の活躍に至つては、寔に吾人思慕の一大對象たり。事實に於て彼等は尊ぶべき處は唯此の楔点にあり、之によりて贏ち得たる燦爛たる紫綬金冠の榮爵は、抑末のみ要は其精神にあり、形骸を通じて内在の實質核子を洞見するにあり。

近時最も世人の注意を喚起して時論の囂々を醸したる自殺は、一青年藤村某の華嚴投身事件なりき。彼は疑問の集團たる人世を解釋せんとして、哲學の後援を借り、あらゆる思索と研究とを費しぬ、而も遂に何等少許の安心的解決を見るに至らざりき而して彼自身却つて極端なる懷疑の渦中に捲き

入れられ煩悶轉展、僅に捕捉し得たる最後の光明は、悲慘なる死の黒影なりき。華嚴の瀑布なりき。之を義務的圈内の立脚地点より觀察し來るときに於ては、彼は當然社會の存在を無視したる敗德者なり、無責任者なり。然れども百尺竿頭更に一步を進めて直接其心理的省察を試むる場合、多くの同情と嘆美とに價すべき事項を發見す、當時の世論が一面に於て、狹隘なる一小我見により、輕舉妄動せるを戒めたりしと同時に、そが未だ年少若輩あるに拘らず大膽にも深遠なる宇宙、人生の意義を解決せんとしたる、摯實なる研究的態度と燃ゆるが如き熱烈なる意氣の壯さに對ては、等しく同情賞讃の辭を與ふるに躊躇せざりき。是の如きは素より千百中偶一二事例に過ぎざるべきも、眞に自殺として意義あらむるもの、此を措いて他に求むべからず。畢竟眞面目ありければなり。彼は人生の劣敗者あり而して自殺に於て勝利者たるの地位を贏ち得たり。

最後に吾人は自殺當事者に對する、世人が客觀的批評の態度につき一言を費すの要あるを見る。意氣と果決と任侠とを以て唯一の主義とせる、武士道全盛時代にありて、稍もすれば自殺萬能神聖説を唱導し、時としては第二者第三者よりして之が決行を強求し一切罪惡の贖回は、自殺によりて得らるべしと云ふが如き、思想布播傳信せられ爲に今日に比し、他動的自殺者の數著しく夥多なりき。斯の如くば敗德無責任等の罪は、寧ろ自殺當事者に非ずして、却つて社會夫れ自身にあり。實にや社會の一言一否は直ちに個人の向背歸趨を決定すべきモメントを作爲す。自殺ある一大事件に對する有力なる裁判官は社會也。故に最も公平にして最も嚴正なる批評的態度は、社會が自殺に於ける一種の責務たり、徒らに雲烟過眼視し、尋常茶飯の出來事として一笑に附し去るが如き事あらば、其禍災の

及ぶ處蓋し知る可からざるものあらむ。自殺に對する責任の一半は、社會之を分有せざる可からず。此間にありて獨り吾人は或特種のものに向つて自殺勸告を提出せんと欲す。特種のものとは何ぞや、即ち彼の主義あく信念なく、偏に輕佻浮薄世の利害と推移し狄々然瞞々然として、無意義の生活をかす走屍行肉の輩なり。社會は彼等の存在に何等の徳とする處なし、否實に日々其存在を呪咀しつつあり。吾人は曰はんとす、此等の人が社會に對する唯一の義務報酬は自殺あり、彼等が其存在を消滅せしむるにありと。少くとも此輩に與ふるに自殺的精神、換言すれば英斷と勇氣との催起を以てせんと欲す。洵に自殺當事者が其將に死せんとする一刹那の感情が、如何に清純偉大に於て悲壯あるか、曉星漸く落ちて淡紅東天に漲るの處、万點白蓮花上の露、以て這般の消息を洩すべき乎。思ふて争に到る、吾人胸裡の琴線漂渺とて無限の幽韻を傳へ、恍として神往超自然の靈感に打たれずんばあらざる也。此時此情正に神人冥合の一太妙諦なり。

呼鳴天地初發以來星霜悠々五千載、其間自殺者の數何ぞ限らむ。知らず是れ社會の罪か、人生の罪乎、抑亦自殺當事者の罪乎、吾人は再言す、人生は矛盾也、撞着也、而して自殺は此等を前提として得たる斷案也と。

夏日の七快。湯あみして髪を梳る。雜除して打水したる。枕の紙を新たにしたる。雨はれて月の出でたる。水をへだてて燈火のうつる。淺き流れに魚の浮みたる。月のさし入たる。

(柳里恭)